

卒業生に贈ることば

来・観・勝

住谷悦治

わたくしの家の二階の客間には、床の間の掛け軸は半年に一度や二度替えた掛け軸が掲げられるけれど、扁額は、数十年来、替えることなく、一つは登張竹風先生の俳句と、他の一つはキリスト教の牧師をしていた叔父住谷天来の「来・観・勝」という三文

字の雄揮な横額が掲げられたままである。この叔父は漢学者で文学者で、わたくしなどのとうてい計り知れぬ学殖・思想の深く且つ高い人であった。とくにダンテとカーライルについては翻訳や論文が多く生涯の師としていたらしい。明治三十年代にカーライルの「英雄崇拜論」を訳して名を知られ、その後ジンスモーアの「ダンテの教訓」を訳し、ウォードの「十九世紀の予言者」(カーライル・トルストイ・ラスキン)を訳し、自作漢詩集「黙庵詩鈔」というのも著わしているが、この叔父の揮毫になるやや大きい扁額の「来・観・勝」という三文字はいつも謎のごとくわたくしの眼を射る。「来・観・勝」とは、ジュリアス・シーザーの有名な東方遠征のさいの初めての戦勝を、ヴェニ・ヴィディ・ヴィンニ VENTI, VIDI, VICI の三文字をもって、有名な足の速い使者をしてローマの妻のもとに報告させたという古伝説の「来た

・見た・勝った」を漢字で示したものであるが、キリスト教徒として、その戦勝報告の文句を自己流に解釈して、「われはこの世に生まれてきた。そして人間として努力奮闘しつつ、社会と人生との真相をよく通観した。そしてキリスト教徒としてこの世の諸悪と苦闘し、ついにわれ世に勝てりの誇りをもつことができた」というようなことを寓意したものである。あの叔父ならば、まさにこの扁額の通りの確信とか自信とかいふものをもって永眠したことであろう。

わたくしは、この扁額をいつも眺めつつ日常生活をしているわけであるが、この世に生を享けたこの事實は何ら疑う余地はないし、従って扁額の第一はパッサしているわけである。しかし、物心ついてから小学校・中学校・高等学校と進学しつづけて大学までも卒業させて貰って、偶然の縁あって同志社に勤め、何年か研究室や教室や学生や同僚教職員と交わっていたが、もてる力をつけて歴史と社会と人と思想とをみてきた。まさに「みてきた」のであるが、果して深くその真相を洞察し真実を把握しえたかどうか。社会にでていくつかの進歩的な、革新的なグループにもその名を連ねられたり、教師として長い間にささやかな、学問的な業績・成果ともつかぬこと、大きな顔をしていえないほどの仕事をしてきた。同志社大学経済学部からは「退職記念論文集」という大きな特別号を出して頂き、当時の小松幸雄部長からは、自分は顧みていのちのちぢまるような、実際の自分の身に余る褒辞の序文まで頂いたが、そのことは、凡庸な平均人として有難すぎることであった。ひそかに自省すればこの「記念論文集」の附録で

調査して頂いた自著単行本三十数冊、論文的隨筆、短文隨筆等々千有余はいったい大学を出てから、えらい意気込みで同志社大学の研究室に入れてもらって以来の(一)教師として、(二)学者として、そして(三)柄にもなく教育者として、果してどれだけの価値があったのか。まったくそれはいま人生の終着駅をさほど遠くもなく薄霧の中に凝視して迷いと疑いとに充たされざるを得ない。この現在の心境は、叔父の扁額の第二の文字、「観」とほど遠いのではないかしらと。わたくし個人としても社会人としても、人生、社会、歴史、現実に対する観察も把握もあまりに浅薄で甘すぎはしなかつたらうか。

人間社会は生産力の発展によって展開し、生産関係の変化と、それに相応した社会的人間の心理・思想・精神との交互関係による発展に伴い、無限に展開してゆく、という樂觀的な考え方。それが正しかったかどうか。いま正しいかどうか。社会的・産業的進歩発展のめざましいそのものの中に必然的に内包されたマイナスにたいしてどう考えたらよいか。いまならいわゆる高度成長を讚美している日本でも世界でも、そこに必然的に、科学・技術の素晴らしい発展をみる。そのプラス面そのものに公害や核兵器による人類への破滅的な道程が内包しているのではないか。樂觀的な人生観をもちつづけてきたわたくしの社会観それは社会科学に基礎づけられた人生観・社会観であり、わたくしの生涯の心のおちつきを結果したかのようにであったのに、いま公害や核兵器のような、世界を滅亡させねばやまない悪魔のように立ちはだかった進歩的・展開的社会が眼の前にある。わたくしは果して、こうし

た憂鬱と苦惱の壁につき当って、叔父の扁額の第二の「観」にたいて、数十年の読みが浅かったのではないかしら、と思う。将棋の天才大山康晴は三十手、四十手先きを読むとかきいている。

その深い読み比べて、社会学者の人間としてまた学者としての読みは少々浅いものではなかったか。いまわたくしは「観」で行き悩んでいる。来し方、行く末（人間的にも社会観としても）朝夕の悩みである。時間は黙々として流れてゆく。悠久に止まることなく流れてゆく。人と社会、人類の過去と現在と未来、科学・技術・文学・芸術・哲学・社会諸科学の諸分野に携わる人びとの現代への切実な認識と把握——この「観」は果していかなる形で行なわれ、いかなる成果をもたらすか。

いま「観」をパスすることが出来ずして、「勝」として、「われ世に勝てり」と叫んでこの世といさぎよく訣別しうるのであるか。宗教達観、宗教的悟り、のみこれを解決しうると人は教えてくれる。恐らく宗教の本質上そうであるに違いない。エデンの園でその昔、知慧の林檎を食べたわれらの祖先は、なお人類に悒悒を負わせているのであらう。新しく一九七一年を迎えてつぎつぎに起こりくるであろう世界と、日本とそして同志社との悩みと喜びと希望とそして、それらすべてへのささやかな与えられた人間の生命をいまいつわりなく燃焼させてゆくのはかはないのである。個人的態度とか個人的人生的態度とかいうことの基本的な強さと、客観的なはかなさとは、われわれにいま負わされた歴史的運命の一つの姿相である。

(同志社総長)

己が仕事を大切にしよう

秦 孝治 郎

「庭上の一寒梅、風雪を侵して開く」との詩は、同志社創立者新島先生の御作である。大学生活四カ年乃至六カ年を勉学され、多くの思い出を秘めて、校門を去られる卒業生諸君の心境に似通った感懐を表現されている。今更何の教訓をも附加する必要がないであらう。

しかし、或る和歌の雑誌に、こんな一首が眼にとまった。
「純粹に情熱燃やす事もなく大学生生活終れといひ得ず……」

織田美津子

この歌人は母性としてわが子に対する一種の不満を告白したのであらうが、もし純粹の情熱が学生の本分である勉学に対し、全身全霊を打ち込まなかつた悔恨だとするならば、両親に対して申し訳ないことではあるまいか。

既に大学生活の終った今日となつてみれば、大学生活に体験した眼にみえるもの、眼にみえない脳裡に内蔵した種々相を無駄にすることなく、須らく活用しなければならぬ。過去に卒業した

先輩の中には、実社会に出づるや否や、苦心惨胆の上断然頭角を現わした青年実業家があった。

大分以前の事であるが、私の実際に当面したことは、東京都内の校友が、大会で集まり約二百名ばかりに及んだ際、自家用車で乗りつけた人々を調べたところ、それは卒業後十年以内の校友ばかりであった。今日のマイカー時代ではさほど驚くには及ばないが、今から十数年以前のことであつたから、今なお私の記憶から離れないのである。

今一つ異つた逸話をあげてみよう。それは生れながらにして身体障害に悩む少年少女に、卒業後の天職を見出し、これを聖職として没頭する校友の存在することである。人としてこの世に生まれたからには、何らかの貴重な足跡を社会に残すべきである。ただ物質のみに走るような近視眼的生活に墮してはならないことも当然であり、殊にわが同志社学園は、直接間接にこれを教えている。

今から六、七年前、同志社九十年小史の編集に当たり、そのうち分担して「同志社に育つた人々」を書いたことがある。大きく分類すれば、一粒の麦、同志社スピリット、基督教界、教育界、学界、文芸界、芸能界、政治界、社会事業界、産業界であるが、わが学園から世に送つた人材としては古く、基督教界、教育界に著名の士を出し、社会事業界には留岡幸助氏を始め、わが国社会福祉の草分をはたしている。現在の卒業生には昔のような特異な人物は尠ないにしても同志社人らしい校友や同窓に接して、学園の片隅で苦勞している甲斐があつたと感ずる実例が尠なくない。

私の所属する奉仕団体である国際ロータリークラブに対し、「職業奉仕の勤どころ」というパンフレットを執筆した。このクラブは単なる社交機関でも紳士の昼めし会でもない。全く一社会人として世に奉仕せんとする赤誠から組織されている。四つの大きな部門とはクラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕と職業奉仕であつて、この職業奉仕は英語で Vocational Service と訳している。Vocation とは天職とも訳すのであつて、その属する会員はその地域における一業の代表的人物が選ばれて入会している。わが仕事を大切にし、それがその地域の模範になる矜持を持ち責任を遂行し、世のために率先して奉仕するのである。どうかわが卒業生諸君がその与えられた仕事を天職と信じ良心を手腕に運用する人となつて頂き度いのである。
(同志社理事長)

地の塩となれ

山本浩三

一月二十三日新島先生永眠の日の早朝、若王寺山頂に集つた

人びとの目は一樣に先生の墓前におかれていた一枚の色紙に集中した。それにはヨハネによる福音書の「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」という聖句と三月に卒業する数名の学生の名前がしるされていた。かれらは同志社大学を巣立つにあたり、こののちかれらが働く場所において地の塩となることを先生に誓ったものと思われる。

しかしながら、そのような誓いは数名の卒業生だけのものではなく諸君全員の誓いであると思っている。諸君は卒業後は終生、同志社大学出身者という刻印を身につけることになる。それは諸君の名譽でもあるがまた十字架でもある。同志社大学は諸君も承知のように、宮利主義の大学でもなければ栄達のための機関でもなく、キリスト教主義を教育の基本とする大学である。それゆえ、社会の諸君に期待するものは、たんなる知識人ではなくキリスト教主義教育を通して養成された品行と精神をもって知識を運用する人であり、社会の良心となる人である。今後諸君の一挙手一投足は同志社大学出身者として社会の注目をあびることをつねに留意していただきたい。

同志社の誇るべき先輩、安部磯雄は自分の行動の基準を、新島先生の評価に置いていたときいている。諸君の生きていくかぎり同志社大学卒業生という肩書がついていくごとく、諸君の生活が新島先生の理想の実現であることを希望する。

二

諸君は幼年期にはじまった長い学校生活をやっと終了し、社会人として活躍されることになった。諸君の柔軟な頭脳には知識が豊かに蓄積され、いまや社会における実践に役立つところとしていられる。しかし人間の知識欲は貧乏なものであって生涯あくところを知らない。一方、今日の管理社会は諸君たちにあたえず新しい知識の修得を要求する。生涯教育は人間存在の根源的な欲求であるとともに社会的生存の条件でもある。諸君は大学において社会現象や自然現象を支配する法則あるいは現象についての体系的な知識を修得された。少なくとも現象の理解の仕方は学ばれたはずである。しかしながら新しい現象についての文献なり、知識については不明なことがあれば遠慮することなく大学に帰ってきて、ゼミナールの先生や他の教授にたずねていただきたい。諸君たちがいま卒業する大学は諸君の生涯教育の大学でもありたいと思っている。また日本のような情報化社会において一流の大学として生存するために豊富な情報の収集と蓄積を基本的な条件とするが、同志社大学は近い将来に予定している新図書館の建設とともにそれらの機能に万全を期し、卒業生の諸君にもそれらの利益を享受していただきたいと思っている。

(同志社大学学長)

吾等は世に与えんと欲す

仁井国雄

一月九日の朝日新聞は、香川県木田郡の小山実一さんという花作り四十年の老人のことを、讃岐（さぬき）の花咲かじいさんとして紹介しています。戦争に生き残って自分のいのちはさずかりものと考え、何かせにゃいかん。自分は花しか知らない。それでは人々に花をおあげして明るい気持ちになっていたどころ。小山さんはこう考えて二十五年間に一人の人々にジンジャ・リリーの球根を配ったといっています。無料で球根やタネを配ると、何か下心があるのだろうと人々の反応は冷たかった。しかも生活は苦しく、妻のマツエさんが女教師時代の恩給やお茶お花を教えて、暮しをささえました。小山さんの誠意は最近になってやっと理解され始め、百五十人と文通をし、草の会会員は一人一人が花咲かじいさんになると約束しています。

私は小山さんの運動に心から共鳴するものです。それは私も花作りが好きだということも理由の一つですが、自分の能力に応じて社会に奉仕するというのが私の願いであり、小山さんは見事に

これを実行しておられるからです。そしてすぐに連想したのは次の言葉でした。

彼等は世より取らんとす
吾等は世に与えんと欲す

これは明治二十三年一月二十七日、新島先生の葬列に加わっていたノボりに書かれた言葉で、筆者は勝海舟で、新島先生が生前常に口にしておられた言葉であります。

吾等は世に与えんと欲す。同志社で教育を受けられ、今社会に出てゆかれる卒業生の皆様に、この言葉をお贈りします。香川県の小山老人は花作りを通じて世に花を与えんと努力してきました。皆様は何を世に与えんとされるのでしょうか。同志社の一員として期待するところ大なるものがあります。

(同志社女子中高校長)

*

*

*